「石見の国」読本

～浜　田　編（石央地域）～

《浜田の歴史と伝統を学ぶ》

島根経済同友会
石見の国再生委員会
石　央　支　部

浜田の歴史と伝統を学ぶ

1：古代石見国府時代における浜田の発展と柿本人麿・・・・・・・・・・・・・・1

2：徳川幕政時代２４８年間・浜田は６万石の城下町として栄えた・・・・・・2
(1)　古田重治の入部と城下町浜田の誕生・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
(2)　松平周防守の入国と烈女鏡山お初・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
(3)　本多中務大輔の入国と浜田宗論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
(4)　松平周防守の再入国と海商会津八右衛門・・・・・・・・・・・・・・・・4
◇　会津八右衛門と密貿易・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
◇　海商一代と「海に生きる浜田」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
(5)　松平右近将監の入国と城下町浜田・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
◇　城下町浜田の終焉・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8

3：浜田藩落城から浜田県誕生まで・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
(1)　長州軍預り時代（慶応２年～明治２年）四年間・・・・・・・・・・・・・9
(2)　浜田県の誕生と新生浜田のいきぶき・・・・・・・・・・・・・・・・・１０
◇　前田騒動とは・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１０

4：浜田歩兵第２１連隊あり、全国に勇名をはせた・・・・・・・・・・・・・１１

5：古くから大陸との交易が行われ
水産基地として、また政治・経済・文化の中心地として栄えた・・・１２
(1)　浜田港と大陸との交易・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１２
(2)　浜田港は明治以後漸次水産基地として脚光を浴びる・・・・・・・・・１３
(3)　廃藩置県以来、実質的に
石見地方の政治、経済、文化の中心地として栄えた・・・・・・１４

『浜田藩追懐の碑』の建立

1：建立のいきさつ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１４
2：建立時の広報・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１５
3：「浜田藩追懐の碑」の碑文・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１５

編集後記・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１６

石見史跡・文化創設年表

＜石見観光辞典刊行会：発刊＞

以　上

浜田の歴史と伝統を学ぶ

１：古代石見国府時代における浜田の発展と柿本人麿

古代において国府町に石見国庁があり、約４７０年の間石見地方の政治、文化の中心地であった。

大化改新（西暦６６１～６７１）に当たり地方制度を改革して、諸国に国司をおき統治させられた時、石見国府は当初は仁万郡仁万町字御門に置かれ、後那賀郡伊甘郷に移されたという説と、都濃津神主の恵良に暫くあったが後伊甘郷に移されたという二つの説があるが、前者には確証はないが後者には大分確証があるので有力である。　何れにせよ伊甘郷に石見国府が移されたのは確かで、その時期は聖武天皇の頃（７２４～７４８）に那賀郡伊甘郷（国府）に移されたとされている。

そして石見国守は、初代柿本人麿からはじまり６６人の国守の名前が判明しているが、最後は高階宗兼の養和元年三月頃（安徳亨１１８１年）来任としてある。

しかし平安時代の後期になると中央の威令が行われず、且つ石見国は西に僻在する関係上国守に任ぜられても自ら来任せず、その下僚である介、椽等に統治を委していたものもあった。

だが永久２年（１１１４年）来任した４９代国守藤原定道は、乱れた中央の政治に希望を失い京師を捨てて勇躍石見に赴任した。　彼は長く石見の地に留まり善政を布いて地方の尊信を一身に集めて任満ちても帰京せず、上府御神本の地に土着し伊甘郷を中心として隠然たる勢力を蓄え、ひそかに新興勢力源平に倣って墾田開拓に専念し、後御神本国兼と改称し豪族化して、名実共に「石見守」となるに至った。

四代目御神本兼高は、建久３年（１１９２）住みなれた上府の地を去って益田に移り、自ら益田氏と名乗り、その後も暫くの間は国府に通って政治を行っていたが、後年そのことも止んで国府は遂に荒廃に帰した。　しかし兼高の子や孫は繁栄して夫々益田氏、三隅氏、福屋氏、周布氏を名乗り、その地方の豪族となって武士団を形成し、浜田、那賀一帯、益田の発展の中心となった。

以上で判るように伊甘郷は約４７０年の間石見の国府として、当地方の政治を行い政治文化の中心地として発展したのである。

次に伊甘郷の国府庁の跡については、延喜の式内社伊甘神社、国分寺跡、尼寺跡、安国寺等の古蹟、古文書等により、現在の下布の伊甘神社付近が有力視されているが、確証ある出土品（国府庁跡）が未だ発掘されていないので今後の課題である。

そして柿本人麿の在任は、古文書によると慶雲２年（７０２）から和同２年３月頃（７０９）までと言われているので、国府が伊甘郷に移る以前にあたるので、人麿の在任国府は都濃津神主の恵良が最も有力であると思う。

しかし、人麿の臨終の地は、都に向かって石見国を出る前に「鴨山」とおぼしきところで死んでいる。　その死は今だに自殺か他殺か刑死か不明である。

そしてその場所も高津鴨山、浜田城山（鴨山を亀山と改称した）、那賀郡神村、江津市二宮恵良、邑智郡湯抱説と五つの説があるが、浜田の国学者藤井宗雄の流れを汲む、栗崎瑞雄氏は「浜田城山」説が最もいろいろな点から確証が高いと説いている。

２：徳川幕政時代２４８年間・浜田は６万石の城下町として栄えた

古田重治	入部：元治５年(1619)２月～慶安元年(1648)６月断絶	２世	３０年
松平周防守	入国：慶安２年(1649)８月～宝歴９年(1759)正月転封	５世	１１１年
本田中務大輔入国	：宝歴９年(1759)５月～明和６年(1769)正月転封	３世	１１年
松平周防守再入国	：明和６年(1769)11月～天保７年(1836)３月転封	４世	６７年
松平右近将監入国	：天保７年(1836)３月～慶応２年(1866)７月落城	４世	３１年

以上のとおり松江、津和野藩が永く安定していたのに比べて、浜田藩はその交替が激しく、藩政は常に不安定な状態のまま幕末に及んでいる。　そして慶応２年７月１８日、浜田城消失により古田重治入部以来２４８年の封建浜田は、遂に終わりを告げ新しい時代へと舞台は移るのである。

(1)　古田重治の入部と城下町浜田の誕生

慶長５年(1600)９月、関ヶ原の合戦が徳川方の勝利に帰し、中国一円、１２０万石を領有していた毛利氏が、防長２国３７万石に減封された後石見は幕府直轄領となり、天領として奉行大久保長安、竹村丹後守等の支配下におかれたが、元和５年(1619)２月、古田重治公が伊勢国松坂から５万石余で浜田に転じて、鴨山（亀山）に高さ２丈６尺１寸に及ぶ殿守造りの三層の天主を中心として築城し、浜田に封建の象徴がそびえ、慶応２年(1866)の落城までその威容を誇ることになる。

次いで城の周辺に侍屋敷を定め、つづいて城下町の経営にのりだすことになる。

すでにこの地は建長２年(1250)益田兼時（初代兼高の孫）が、閑院内裏再建のため木材を送り出した港として、また室町時代には石見５港の一つとして明、朝鮮との貿易の一翼をになっていたし、中世以来発達していた君市、牛市、小野市などの定期市として集落が形成されていたので、これを基礎として町割がすすめられた。

そして紺屋町、新町、蛭子町、片庭町、門ケ辻町、檜物屋町、辻町、原町のいわゆる浜田八町の、職人町や商店街がかたちづくられたのである。

また、今も蛭子町、片庭町等に残っているように町の所々に広場を設け、辻井戸を掘るなどして、万一の非常の際に具えるなど、着々と城下町の経営はすすめられ、その結果繁栄の中心は、今までの門ケ辻町から蛭子町へと移っていった。　城及び城下町が一応整備されると、重治は兄重勝の子重恒に家督を譲ったが、嗣子なきため古田家は二代３０年にして断絶した。

(2)　松平周防守の入国と烈女鏡山お初

慶安２年(1649)８月松平周防守康映が、古田家の後をうけて播磨国宍粟より浜田へ転封を命じられたが、関ヶ原後以後５０年間に今まで５度も転封されているので、心よく思っていなかったようである。　従って浜田に対しては愛着を持ち、前後あわせて１７８年と徳川幕政下の３分の２の長さに亘って支配したのであり、それだけに浜田発展に深い関係を持っていたといえる。

しかし、松平家の浜田配置は石見における譜代大名の最初の進出として注目され、ここに中国地方は福山、松江と共に松平一門、譜代大名として中国地方における大名配置が完了され、徳川幕藩領体制の確立をはかった。

かくして康映は、家老岡田竹右衛門以下士分１５９名の外三戸屋、牧野屋、松尾屋、岡野屋、茶屋、東野屋、田原屋、和泉屋など２４戸の商家の者を引連れて入国し本格的な藩政をはじめた。所領地は那賀郡６０ケ村、邑智郡３５ケ村、美濃郡は

４２ケ村、計１３７ケ村に及び、その各々で津和野領、天領と交錯していたのである。　藩政の中核となっていたのは言うまでもなく、農村であったが武士の経済生活がいきづまってくるに従って、浦（漁業）が大きな関係を持つようになって来た。

この浦は、浜田領全体で２８浦を数え、そのうち浜田市内に含まれるものに生湯、松原、浜田、熱田、長浜、日脚、津摩の各浦があった。

また寛文２年(1662)城下の経済発展を図るため、今までの中心商店街蛭子町に続く新町へ商家を移したため、爾来新町に繁栄が移って行くことになったのである。

後２代かた３代にかけて領内の検地、浜田領絵図の作成をして、藩政の基盤づくりを進めるにつれて世情も安定し、人口も増えて城下町も次第に活気を帯び、新しく真光町や錦町等が出来た。　４代康豊となったが治政下の享保年間(1715 ～1735)は、全国的に大凶作の続いた時代で百姓一揆が続発しているが、浜田藩でも大ひでりが続き、浜田領一揆を起こし首謀者が処分されている。

そしてあの歌舞伎で有名な「加賀見山事件」も、この時代(1724)、江戸の藩邸で「鏡山お初が、主人である中老岡本道女の仇を打つため老女沢野を刺し殺した」事件で、赤穂浪士討入からわずか２０余年後のことである。　これが「女の鑑み」として、主人への忠誠心を高く評価され江戸中に喧伝せられ、遂に、「歌舞伎」になり永く世の称揚するところとなったのである。

５代康福は明敏にして幕府の奏者衆に加えられていたが、宝暦９年(1759)正月寺社奉行を兼ねることになり、同時に江戸に近い下総の古河に移封された。　間もなく大坂城代となり三河の岡崎に転じたが、宝暦１２年(1762)１２月擢んでられて、老中に列したが浜田の地が忘れがたく１０年先で再び浜田に帰ることになる。

(3)　本多中務大輔の入国と浜田宗論

本多中務大輔忠敞は宝暦９年(1759)５月浜田に転封されたが間もなく没し、あとを忠盈が嗣いだが明和４年(1767)３月には財政建て直しのため銀札を発行し、次いで３代忠粛の世にかけて領内に宗論が起こった。

一つは、真光寺庫裏普請のため長沢村の持ち山を伐採して用材に充てた処、翌年この地方に大干害がおこり、特に長沢村の被害が甚だしかったので、これは持ち山に祭ってある大元大明神の社木を伐採したたたりであると、村民達が騒ぎ立て長沢村と真光寺の出入がはじまった。　両者の交渉は再三にわたったがまとまらず遂に社家を頼み再び持ち山に大元大明神を祭ったために、真光寺対社家との間に論争が起こったので藩も仲裁により一応落着は見たが、大元大明神と信仰をめぐる浄土真宗の対立は簡単にはとけず、後の浜田宗論の発端となり永く尾を引いた。

丁度この頃、長州の僧で円空というものが石州地方に来て、浄土真宗の安心説に対抗して異安心説を説いてまわったので、京都本願寺ではその説伏をするため蓮如上人九世の孫仰誓を安芸、石見に派遣して異安心説の打破と宗勢強化にあたらせた。

その時仰誓が甚だしく他宗を誹謗したところから、城下の真言禅浄土９ケ寺の住職との間に論争が起こり、領主に訴願したが仲々捗らないので９ケ寺の住職は明和４年(1767)藩の制止にも拘らず、時の老中が元浜田藩主松平康福であることを頼りに強引に幕府に直訴した。

こうして浜田で起こった論争は江戸に移ったが、情勢は厳しく寺社奉行より関係寺院の出府が促され吟味の結果、仰誓らは他宗を誹謗の廉で厳叱せられ、寺院の命を奉ずるも藩主の命を奉ぜざる住職ら５名を処罰して漸く段落をつけたが、再び松平周防の時代になって、大元大明神の信仰については「社木を伐採しないこと、祭事は行なう」ことで判決が下された。

しかしながら宗論の判決は、結果的には藩の意向を無視して強引に幕府に直訴した諸案９ケ寺に不利に浄土真宗側の勝訴となり、そのため浄土真宗の布教はその後益々積極的となり、石州における信徒も次第に増えていった。

明和６年(1769)１１月、松平周防守康福は老中のまま岡崎より再び浜田に封ぜられ、これに代わって本多忠粛が三河国岡崎に転じた。　こうして見ると本多中務は松平康福が寺社奉行から老中を務めている間の、留守居として１０年間浜田に来たようなことになった。

(4)　松平周防守の再入国と海商会津八右衛門

明和６年(1769)１１月、松平康福は希望が聞きいれられて老中のまま浜田に封ぜられたが、老中のため江戸を離れることが難しいので、養子康定を浜田において政務にあたらせた。　当時幕閣の実力者田沼意次と康福は姻戚関係にあったので、天明５年(1785)正月、意次と共に一万石を加増され６万４百石余となり遂に老中首座まで推されたが、やがて田沼意次が失脚するや天明８年(1788)老中を免ぜられ、江戸を離れて浜田に帰った。

こうして浜田藩は、再び松平周防守によって４代６７年間その治政下に過ごすことになった。

しかしながら、老中として永年政治的にも活躍した康福も、その翌年の寛政元年(1789)に没し、その後を養子康定が嗣いだ。　康定は賢明にして好学特に国学に造詣深く、本居宣長に教えを乞い、小篠敏をはじめとする数多くの国学の秀才が輩出した。

特に民政には細心の意を用い領内を巡視し、民情を視察すると共に財政再建のため柿木山に植林をした。　文化４年(1807)３月康定は江戸で死去し、康任が後を嗣いだが彼もまた好学、明敏で国学を奨励する外、民政に意を用い文化７年(1810)の１０月の浜田の大火には、藩主は直ちに馬を駆って巡視し罹災者に対して応急の米銭の給与と復興資金の貸与を行った。

そうして文化４年(1817)には推されて寺社奉行となり、つづいて大阪城代から文政８年(1825)、翌９年には西の丸老中から本丸老中へと、康福とおなじように栄進の道を歩みつづけたほどの藩主であったが、その時常にライバルとして任の後を追うて栄進の道を歩んでいたのが水野越前守忠邦であり、この両者の対立確執がついに周防守家の奥州棚倉への転封の一つの原因として発展するのである。

かつて高野山に詣でたとき、そこで奥の院の墓地に他の大藩と列んで「石州浜田藩」として、立派な廟が建っているのを発見した。

浜田藩から松平康福と康任の二人の老中の、偉大な政治力を目のあたり見るような気がして誇りを感じたが、同時にそれまで幕末における浜田城落城のイメージしか持っていなかったので、かつての松平周防守の二代にわたる老中時代の、偉大な政治力を目のあたり見て感慨深いものがあった。

やがて康任は、馬国出石藩の御家騒動に姻せきの故を以て連座し、天保６年(1835) に老中を免ぜられた。　嫡子康爵は家督を嗣ぎ周防守に任ぜられたが、翌７年(1836) ３月に奥州棚倉へ転封を命ぜられ、浜田城入替の日限を９月２７日に定められた。　こうしたあわただしい状態の中にあった周防守家に、さらに追い打ちをかけられたのが会津屋八右衛門を中心に行われた密貿易の発覚であった。

◇　会津屋八右衛門と密貿易

藩の回船御用をつとめていた松原の回船問屋会津屋清助は、当時禁止されていた２千５百石積みの巨船を建造し、他の藩をはばかって無名のまま大阪に出航し、世

人から「阿呆丸」と呼ばれた。

文政２年(1819)の秋、江戸にむけて出航したところ、紀州灘で大暴風雨にあり何日かを漂流するうちにオランダ船に救助され、ジャワ、スマトラ、ルソンなど、東南アジア各地に寄航したりして、文政５年(1822)漂然としてほとんど裸に近い姿で浜田松原に帰って来た。

清助の漂流談の中には南風が吹くと寒いとか、北風が暖かいなどという話があったので、八右衛門は密航と幕府に咎められてはいけないので清助を気狂い扱いに藩に届け出たので、これを聞いた町の人々は清助もついに気が狂ったらしいと噂した。

しかし伜の八右衛門は、父の漂流談をくり返し聞かされているうちに、しだいに海外雄飛の念が昂まりくるのを覚え、手さぐりで粗末な地図を作っているうちに竹島（鬱陵島）を見つけた。　そこで八右衛門は、ひそかにここえ密航を企てたのが文政７年(1826)のことであるが、「北風が吹くと暖かい」島の手がかりはつかめなかった。　そこで渡辺華山に教えを乞いいろいろ研究した結果、「北風が吹くと暖かい」地が確かにあり、父の漂流したスマトラ、カンボジャも明らかになり欣喜雀躍、そこで先ず壮図の手はじめにさきに密航してみた竹島を捉えた。

一つには阿呆丸遭難で衰えた家運をもり返し、あわせて窮迫した藩の財政に寄与するためにも、またとない好機と考えられたのである。

八右衛門は藩の勘定方橋本三兵衛に竹島渡航のことを打ちあけ、家老岡田頼母に通じ、更に家老松平亘の知友である宗氏の臣松村但馬を頼って宗氏の記録を調べ、竹島が無所属であるとして頼母は年寄役の松井図書に相談し、老中として江戸在勤中であった藩主康任に申し出た。

康任は重大なこと故十分に調べて申し立てるよう返答し、さらに異国の品が「大阪以東に出回っては大変であるから」許可のないうちに渡航することのないよう戒めた。　頼母はこの事を八右衛門に告げて、渡航を断念せしめた。　しかし断念せしめたというというのは、あくまで表面的なものであり、「大阪以東」は含みのある言葉であると解釈し、岡田頼母、松井図書、橋本三兵衛らは、八右衛門と密議し渡航の決行を話し合ったのである。

その結果、天保初年(1830)の頃から竹島渡航がはじまり、次第にその交易範囲は朝鮮、中国からさらに清助の漂流談を実地に確認するかのように、台湾、安南、ルソン方面にまで拡大されて珍しい品々が荷揚げされ、八右衛門は巨利を博し藩へも莫大な運用金を納め藩財政の確立に役立った。　当時南洋各地から持ち帰ったと伝えられる品々は、高佐の肥塚家などにも珍蔵され、江津、都野津辺の人々の中にもこれに加わったと伝えられている。

しかし、この偉大な構想も僅か数年で図らずも露見した。

それは薩摩藩の密貿易を内偵するために、天保７年(1836)の春、山陰道を通った間宮林蔵に感ずかれ、その通報を受けた大阪西町奉行の隠密の探索によって摘発され、天保７年(1836)の夏、橋本三兵衛と八右衛門が捕らえられだからである。　三兵衛も八右衛門もすでに覚悟の上の事であり、三兵衛は妻子を分籍して別家を立てさせ、八右衛門も妻を離縁し、実家の長浜の若松屋に帰らせ、子供は大阪へ養子に出していた。

この発覚には、藩主も幕府も極度に狼狽した。　浜田では岡田頼母、松井図書の二人が藩の責を負いそれぞれ自刃して果てたが、その年１２月その他の関係者に対しては幕府からそれぞれ判決が下されたが、橋本三兵衛、会津屋八右衛門の二人に対しては死罪が下され、二人は責めを担い男らしく処刑された。　時に八右衛門は２９才の男盛りであった。

そして元藩主康任も責めを負うた。　即ち周防守を改めて下野守とし永蟄居を申し附けられ、時の藩主康爵は元保７年(1836) ９月、浜田城を離れ奥州棚倉に移った。

こうして、１７８年にわたる松平周防守家による浜田支配は終わった。

この竹島事件は、ただ単に浜田藩や会津屋八右衛門の悲劇にとどまらず、鎖国のもたらした日本の悲劇の一つであり、当時盛んであったと見られる密貿易も鎖国の壁にさえぎられた国内資本にとって、止むにやまれぬ動きであったというべきであろう。

しかし、開国に踏み切ることによって幕藩体制がもろくも瓦壊することを恐れていた幕府は、一部の開国論者や智識層の意見に関心を払いながら、翌８年(1837) ２月２１日に「浜田藩、無宿八右衛門の竹島渡航は吟味の上厳罰に処したので、今後異国渡航の儀は重き御制禁に付き竹島は勿論のこと遠洋渡海は致さないように」という触書を、全国高札場に掛け鎖国の再認識を行わせていることからしても、今回の判決は幕府の苦心の跡が察せられる。

◇　海商一代と「海に生きる浜田」

八右衛門のこの壮挙が浜田に与えた心理的影響はまことに大きいものがあることは、後世「浜田」を論ずるものの忘れてはならないことである。　「港浜田」「対岸貿易浜田」は、まさしく今から１５４年前天保初年(1830)に、雄々しく発足しているのである。　そして僅か数年間であったが、この雄大な海上交易が浜田城下の商業経営に大きな刺激を与えたことも見逃してはならない。　後昭和１１年１２月海商八右衛門の壮挙を讃えるため、松原鰯山の突端に時の内閣総理大臣、海軍大将岡田啓介の揮毫により記念碑が建立されている。　そして碑文の中に、“偉なる哉八右”“導け八右”“あやかれ後世”と記されていることは余り記憶にないだろう。

また、浜田の民謡にも、“海商一代”として、心ある人に歌われているその一節を紹介しておく。

「海商一代」

(1)　揺らぐ灯明に　かしわ手打てば
あすは船出の　血がさわぐ
海の勝負に　いのちをかけた
姓は会津屋　名は八右衛門
親爺ゆずりの　男の男

(2)　移る時代の　夜明けを待たず
落ちて消えゆく　流れ星
藩の御用を　世の人のため
かおるその名は　花たちばなと
今も浜田の　松原岬

(5)　松平右近将監の入国と城下町浜田

松平周防守康爵転封のあとを受けて、徳川の親藩大名である松平右近将監斉厚が上州館林６万石より浜田に所替を命ぜられ、正式に城の受け渡しが終わったのは天保７年(1836) ９月２７日である。　右近将監の家は、六代将軍家宣の弟松平清武にはじまり、斉厚の祖父武元は松平周防守康福と共に幕閣に列し、老中として３０年の長い間在任した家柄である。

当時右近将監家の重臣達は、財政的にも海のない館林よりも海に臨む浜田への移封を実質的に加増であると喜んでいたが、その反面、斉厚は山陰という僻遠の地より山陽の福山への移封を望んでおり、養嗣斉良が将軍家斉の１９子なので、それを頼りに江戸大奥へ嘆願していたが成功しなかった。　しかし浜田藩も敢えて禁を破ってまで海外貿易をするくらいであり、決して他所目で見る程財政は楽ではなかった。

当時恰も浜田は飢饉に喘ぎ多数の餓死を出し、一刻も放任出来ない状態であったので、その対策として備荒貯蓄を考え天保８年(1837) ９月社倉を設けて「永康倉」

と命名し、扁額をつくって各蔵々に掲げさせ、備蓄米の徹底を奨励したが斉厚には一つの願いがあった。　それは「右近将監」の家格をあげたかったのである。　そのため巨額の運動費はいるし、その上転封のときの莫大な費用は残っているしなどで、藩は山積する負債に苦しみ遂に無加印の銀札を濫発するに至り、藩の信用度を失墜し、政情も不安定であった。

望みをかけていた養子斉良は天折するし、斉厚自身も天保１０年(1839)若死する。

その後讃岐高松藩から迎えられた武揚も、次いで尾張藩の支封高須から入って藩主となった武成も共に政道に励み、仁政を布くために日夜努力したが何れも短命に終わり、藩の財政は益々苦しくなるばかりだった。　そこで家老安芸織部真利は銀札掛河鰭監物らと相謀り、当時実学派として名高い肥後の横井小楠に教えを乞い、弘化３年(1846)産業資金調達のため浅井村庄屋河上甚九郎ら四名を京都、大阪に派遣し金策にあたらしたが、情勢は厳しく主命を果たせなかったので河上甚九郎はその責めを負い自刃したが、そのことがパッと洛中に広がったため、「石州人の義理がたさ」に感じた知恩院らの金策に成功し、ひとまず急場をしのいだ。

そして武成は弘化４年(1847)９月、２３才で亡くなったので藩は喪を秘して水戸藩主徳川斉昭の１０男で１５代将軍慶喜の弟であり、武成の従兄弟でもある当時６才の十郎麿（後１３才で元服し武聡となる）を、同年１２月養子に迎えた。

武聡は父水戸烈公に似て真摯でありその志は水戸学統によってまことに固く、藩政は武聡幼少の故を以て主として政務は家老の織部真利、財政は銀札掛の河鰭監物が当たっていたが、当時の藩の政務は即ち財政問題であると言ってもよいくらいであったので、河鰭監物に重い責任がかかる。　この二人はかつて斉厚が考えていた経済両面政策を練り直し、積極的には産業を盛んにして藩利を増し、消極的には緊縮政策を厳に励行して質素を旨とし、節約を徹底せしめる方途を講じ、武聡を迎えて本格的に財政再建の施策を進めることにした。

即ち産業振興の主なものは植林、石見半紙の奨励、鉄山の開発などがあげられる。

先ず植林について見ると柿木山、大麻山をはじめ、山林の大規模な植林を積極的に奨励し、また匹見の自然林を活用するため道路の改修や舟運の便を図っている。

石見半紙（椿半紙）の主産地は美濃、鹿足郡一円と那賀郡東部の山間部で、大阪に紙問屋を開く等石見半紙の発展に寄与すること大であった。　領内で板紙生産は年２万石盛んな時は５万石に及び、「浜田藩の祿高は６万石だが実際は１０万石ぐらい」だと世間から噂された。　次に鉄山の開発については主として砂鉄であるが、邑智郡においては良質なものが沢山採取され、浜田でも美川一帯で山小鉄、日脚、津摩では浜小鉄がとれ、盛んに製鉄を行ない経済的に藩の財政を温かくした。

その他畳表、陶器及び瓦、櫨の植林と蠟製造等をその他に応じて奨めた。　また全般的には養蚕も大いに奨励した。　今から思うと、河鰭監物ともあろう人が何故無限の宝庫たる海の開発に乗り出さなかったか疑問が残る。　かつての会津屋八右衛門の竹島事件に懲りてか？

こうした一連の藩財政難克服の諸施策を推奨すると共に、数度に亘って質素倹約の励行のため倹約会を発し、次いで矢継ぎ早に触書を出したが実効は上らなかった。

藩の首脳は憤りと焦慮のあげく、自らを戒めるため役向きへの音物、饗応をいましめ、冠婚葬祭の節約等微細を極めた節約書付けまで出しているが、全然効き目がなかった。

斯くして藩は民心の離反と財政危機に立って、藩はどうにもならないところまで立ち至っていた。　その上、藩主武聡は安政元年(1854)１３才で元服したが、もともと病弱で文久元年(1861)２０才を最後に参勤交代も出来なかったようで、２１才

のとき佐倉藩堀田家より婦人を娶ったが、その頃京では尊王攘奏派三条実美らの七郷落ち、蛤御門における幕府と長州藩の戦いははじまっており、すでに明治維新の息き吹きはじまっていたのである。

◇　城下町浜田の終焉

長州藩追討の朝命を受けた幕府は、元治元年(1864)７月２４日石州口より萩、山口を攻撃する追討軍として浜田、松江、鳥取藩等を定めたが、長州藩の三家老が自刃、藩主が謝罪をしたので一旦は撤兵を命じた。　しかし長州藩内ではその後高杉晋作を中心とする主戦派がこれに抵抗し、紛争がつづいたが遂に勝って主戦派に統一されたので、幕府は再び追討軍に出兵を命じたが今度は各藩共消極的であり、特に尾州、紀州、薩摩、備前等の雄藩はこぞって再征に反対した。

こうした情勢の中で、幕府は長州征伐を強行することに意を決し、石州口は福山藩を主力として浜田、松江、鳥取、津和野藩が加わり、紀州藩徳川茂承が総指揮のもとに攻撃態勢をととのえることになった。　しかし浜田藩主松平武聡の心は揺れた。　長兄は１５代将軍慶喜であり、次兄である鳥取藩主、岡山藩主は共に長州軍の再征に反対していることであった。

浜田藩は命により慶応２年(1866)５月、物頭岸静江を藩境扇原関門の守備を命じたが、一方長州藩高杉晋作を中心とする主戦派は薩長同盟を結び兵備を整え、石州口の総指揮は村田蔵六（後の大村益次郎）がとり、奇兵隊を先頭に、かくして第二次征長の彼の戦端は切って落とされた。　６月になると福山藩が続々と浜田、益田に到着し、その動きは日々にあわただしさを加えてきた。

石州口では１６日になって長州軍の主力部隊が高津川を渡り、横田村に達し、浜田藩主に対して書を送り出師の理由を明らかにした。

申入れの内容は丁重で、浜田藩をあくまで壊滅することは考えていなかったようである。　長州軍は更に兵を進め、藩境に迫り関門を突破しようとしたが関守岸静江は応戦し、壮烈な戦死を遂げ後世に名を残した。　その後の石州口付近の戦況は幕府の連合軍に利あらず、足並みが揃わず多数の死傷者を出し幕軍の大敗に終り、長浜熱田まで退却したため城下は大混乱になり、人々は戦争の恐怖におののいた。

長州軍はこの間再三にわたって浜田藩に書を送り再考を促したが、その時藩主武聡は長い間病床にあり、藩の去就はなかなか決せず徒らに日々を送った。

７月に入り長州軍は再び行動を開始し、１３日から１６日にかけて大麻山、雲雀山の攻防をはじめ、美川の内村、内田一円で砲戦が続き浜田城下までとどろき、人々は動揺して生気なし、特に１６日の長州軍の攻撃は激しく、紀州兵、福山兵は浮足立って崩れ去った。

事態がいよいよ急を告げたので重臣達は相謀ってひそかに停戦の申込みを協議し１７日河鰭監物が潜行して、周防の長軍本陣（大谷庸介氏宅）に行き停戦の申込みをした結果、長軍はその折衝に応じて一応停戦したが、監物は長州軍の城下町通行に対して折衝したが、なかなか意見がまとまらず時間を要した。　一方城中においても１７日城の運命を決める最後の会議が重臣数名で秘かに開かれ、病気中の武聡は婦人と共に出席し、その席上藩主婦人は武聡と共に城を枕に死守することを主張したが、用人生田精は病主や夫人と共に籠城しても戦闘の決意が鈍る故、藩主を城外に移して後守城決戦すべきであることを唱えて衆論をまとめた。

武聡も夫人も涙を流してこの練言を納得し、その日の夕方ひそかに城を出て、松原湾を離れたのは１８日の夜明けに近かったという。　思えば７月１７日のこの会議は、封建浜田に制度上の終りを告げるための最後の歴史的会議になったわけで、時に慶応２年(1866)武聡２５才であった。

守城決戦と決まって改めて具体策を練るための会議が１８日開かれたが、藩主退城のことが薄々知れると議論が沸騰し、他藩の協力なく籠城は無謀な戦いであるという和戦論が強くなり、衆議は一転して「城と侍屋敷を焼いて一同浜田を去りやがて再起をはかる」ということに決まった。

それからの混乱、一抹の寂しさが浜田を覆う、誰れが火をつけたか突然天主が黒煙をあげはじめた。　浜田城焼失は１８日午後２時ともいい、４時過ぎとも謂われているが元和５年(1619)吉田重治が築いた亀山城も、慶応２年(1866)７月１８日浜田落城により炎上し、２４８年間続いた城下町の終りを告げたのであり、余りにも悲惨な出来事であった。

今にして思えば、浜田町誌によれば藩主武聡は松原湾を離れる時、舟の中で藩民の身を思い「病中の自分を斬って首を海中に投げ棄てよ」と言って聞かなかったと記されているが、水戸烈公の血を引いた武聡公のためにももっと変わった敗戦処理はなかったものかと惜しまれてならない。

また作州鶴田に移った浜田藩士の「浜田会」須藤さんの発行による「浜田藩雑記」によると、７月１８日城が炎上した頃浜田藩斉藤十郎次が長州軍の和平解決の回答書を携えて、長浜村福井浜附近を浜田に向かって急いでいたことが記してあり、浜田城炎上がもう一時間でもおくれていれば、浜田の運命も変わった方向になっていただろうに、誰が火を付けたか、命じたか判らないが後世浜田のために残念でならない。

そして慶応４年(1868)１月２日の鳥羽、伏見の戦は、上野彰義隊と共に幕府最後の抵抗であったが、激戦の未遂に幕府軍は敗退し、新政府軍の勝利は決定的となった。　この戦いには、浜田藩も隊長佐藤鎮太郎以下５０名参加したが、これは藩を貧困のどん底から救い出し、名門松平右近将監家を復興、更正しようとする最後の非常手段でもあった。

城代家老尾関隼人が責任を追うて自決したので、朝廷から特別の計らいで作州の地鶴田２万７千石余りが与えられた。　現在作州鶴田に浜田藩士関係者により「浜田会」が設立され、会誌を発行し、浜田藩雑記を編さんする等旧君臣の情誼を伝え、また浜田市との交流が行われているが、今後の友好促進が両市町の発展に役立つことを祈って止まない。

3　浜田藩落城から浜田県誕生まで

(1)　長州軍預り時代（慶応２年～明治２年）四年間

慶応２年(1866)７月１９日（落城の翌日）、南国隊長佐々木力也らは浜田に入り「長州支配」を宣言する。

その当時、幕府は石州口の大敗で全く威信を失い、翌３年１０月将軍慶喜（武聡の兄）は大政を奉還し、ここに徳川３百年の幕を閉じて新しい明治を迎え（慶応４年９月明治と改元）、天皇新政の統一的改革が始まった。　これから明治２年（1869）８月までが長州預かり時代の４年間であり、浜田にとってはその精神的意義が極めて重大であったと思う。　即ち、その一つは浜田は「落城」という思いがけないことで、全国のどの藩よりも一足早く封建から解放された。

しかも、突如として混迷の裡に封建の支配力がなくなったのであって、「藩民の苦闘の結果でもなければ、期待していたことでもなかった」、もう一つは、「落城のあとへ長州軍という別の支配力が入って、占領下におかれたので自主性のない浜

田が生まれたことになる」、この二つのことは、これから後の浜田の動きをたどるものの見逃してはならん点である。

浜田に入った長軍は、やがて石見においても旧天領の大森と浜田藩を合わせて支配し、浜田に民政官をおいた。

初めは民衆に対しては「寛恕収攬」を旨としたが、落城の翌8月に西原井組のものが長州軍に要求を差し出すことで長州軍との間にトラブルが起き、それが大騒動となり民衆が黒川中芝酒屋付近に集まったため、長州軍は遂に発砲して鎮圧する等の事件があったのでその後は警戒するようになった。　後黒川村が落城により焼野原と無秩序になった浜田の状態を見て、いち早く立ち上がり焦土復興と秩序維持に乗り出したので、長州の民政所がこれを褒めて柿木山の一部を黒川村に与えたのもこの時代であった。

明治2年(1869) 5月になって、長州人佐藤寛作（後信寛と改む）が民政官として浜田に赴任したが、その年の秋は凶作であったので8月長州預かりを解き大森県とすることに定められたに拘わらず、長州軍が１０月浜田を引き揚げるまで彼は凶作対策に努力した。　そして本格的な凶作対策は大森県に移されることになった。

(2)　浜田県の誕生と新生浜田のいきぶき

明治2年(1869) 8月、大森県がおかれ隠岐がこの管轄に入って、本庁を大森町に浜田と西郷には支庁が設けられ、茲に新しい政治がはじまってくる。　間もなく翌年1月になると大森県を廃して浜田県が生まれる（県庁は現郵便局のところ）。

所管はそのままなので本庁が大森から浜田に移り、県名が変わっただけである。

そして県知事は大森県以来の真木直人が任ぜられ、県会として佐藤信寛（民政官佐藤寛作が改名して信寛となる）が任ぜられ明治9年まで在職し、県の統治に専念することになる。

浜田県になり、本庁が浜田に転じて数カ月後に異動が起った。　世に前田騒動といわれている。

◇　前田騒動とは

浜田藩は、突如侍社会が壊滅して、残された武士は失業し虚脱状態になった。

これらの中には新政治への不満を抱いているものが多数いたが、民衆もまた新政府のやり方が朝令暮改で頼りなく思われていたが、わけても浜田は、敗戦による自暴自棄に加えて凶作に襲われて民心が動揺していたので、これらのことが原因となり前田騒動となったのである。

この首謀者は前田誠一という浪人で浜田の宿屋に宿泊中、県庁から危険人物と見なされ早刻立ち退きを命じられたが、病気のため出立することが出来なかった。
ところが1月１３日晩、突然早鐘が鳴り出したので火事と思い大勢の野次馬が飛び出して見ると、前田誠一が大橋の裾に立ち上がって新政府の不当と官憲の横暴を叫んで演説をはじめた。　遂に同志、町民と共に県庁を襲撃し占拠した事件である。

江津に難を逃れた真木県知事は、態勢を整え反撃して県庁を奪回し、首謀者前田は自殺してこの騒動は収まった。　前後に大田付近や益田でも暴動が起きている。

この前田騒動は仮令一浪人の暴挙とは言え、固く結ばれた同志と町民を連れていたことは、新政に対する単なる反抗ではなく相当な強さを持っていただけに、今後の浜田県政は楽観をゆるさねものがあったことは見逃してはならない。　県庁では直ちに凶作による窮民救済に乗り出し、救援米の下げ渡し等を行い人心も落ち着いて来た。

松江、津和野藩にあっては新制度が布かれたとは言え、旧藩主が藩知事として残っていたから徐々に且つ順調に転換が行われたが、浜田藩においては一挙に壊滅し新しい支配者による占領下であったため、ある意味では新生浜田建設にもって来いの機会であったに拘わらず、ただ自己保全に専念する傾向が助長されたことは否みがたいところである。

全国的な廃藩置県は明治４年(1871)７月１４日を期して断行されたが、明治維新の直轄地（長州軍預かり）であった浜田県は、この廃藩置県に先立って出来たもので、新しい地方行政のモデルであり、県庁は新しい政治体制にかなう執行機構を定めるのに特に苦労したようだ。

なお津和野藩は、全国的な廃藩置県に１月余り先立って明治４年６月２５日に浜田県に合併され、同時に隠岐は島根県に所管換えになり、浜田県は元津和野藩庁の建物を解体、浜田に移築して新しい浜田県庁舎が完成した。

浜田県権令には佐藤信寛が県令より昇任せられたが、その後何回も機構改革を行なって県制の体制を整備すると共に、藩政時代より奨励しておった石見半紙の生産を中心に産業の振興を促し、また他に先がけて広く会議を起こし民衆を民主的に行動させるため、明治５年浜田県民会議を設立して議員を選任し民意尊重の途を開いた。

そして末端行政機構として大区、小区の行政区域を設け大区に正副区長、小区に正副戸長をおき、のち郡役所、大区、部を設ける等、浜田県独自の行政改革を行って、人心の収攬と民政の安定、産業の復興等に努力した。

このほか明治維新は大きく日本の社会を変ぼうさせ、浜田にもその影響が現れた。　即ち明治５年より小学校、師範学校の開設、浜田新聞の発行、浜田警察署、郵便局、病院の設置があり、新町、紺屋町、蛭子町等には商店街が形成されたのである。

この浜田県は、明治９年４月島根県に合併され浜田に支庁がおかれた。

このような状勢の間にあって、新しい政治と文化が逐次滲透して浜田の動きが軌道に乗って来る。　しかし浜田人が、新時代として政治的にも経済的にも自覚したのは、明治１０年～１２年三菱汽船から大阪商船が浜田港（瀬戸ケ島）に寄航しはじめてから、明治２８年浜田港が特別輸出港に指定されて神戸税関出張所が設置され、次いで３２年開港に指定された頃であったと思う。

これが契機となって視野が拡大し“海と浜田”のつながりが、多方面に成り立つようになり、かつて港が繁栄を極めた古き時代（周防家時代及び八右衛門）が心に甦り、文化的にも伸張を見せる。

この機運を更に高めたのが、明治３１年の浜田歩兵第２１連隊の広島からの移転であり、大正時代の国鉄山陰線の全通である。　これにより、浜田の海陸による交通開発への関心が政治的にも経済的にも昂まり、やがて大浜田市の実現を促す精神的基盤となる。

４：浜田歩兵第２１連隊あり、全国に勇名をはせた（明治３１～昭和２０）

明治３１年(1892)国防上の必要から、浜田に歩兵第２１連隊が広島から移転することになった。

当時、浜田港（瀬戸ケ島）は、明治３２年貿易港として指定を受け、神戸税関出張所が設置されて大阪商船の寄港地として港界隈は活気を呈していたが、それ

に加えて連隊が移転したため、広島～浜田間の建設道路工事をはじめ、兵舎、練兵場、射撃場、衛戍病院その他の施設や建築工事が急ピッチで進められて、浜田は連隊ブームに湧き返えり、浜田の街は浜田城の落城後３０余年振りに生気を取り戻したような感があった。　爾来、朝日町一帯が商店街として繁栄を見るようになった。

浜田連隊の徴兵区域は、石見全域の外、簸川郡、飯石郡で戦争末期一時松江地区も浜田連隊に入隊する時期があったが、そのため面会日は家族達の往来で浜田の街は特に賑わったものだ。

移駐以来、北清事変、日露戦争、満州事変、支那事変、第二次世界大戦に参戦し、その間数多くの戦死傷者等を出しながら、全国に「浜田連隊」の勇名をとどろかしたのである。　日清戦役における勇敢なるラッパ手木口小平の銅像や、又第二次戦争中軍歌で、「浜田の兵隊、戦（行軍）に強い、強いはずだよ波子の浜、波子の浜辺で鍛えた腕（足）だもの」を、三瓶行軍の途中歌い、士気を鼓舞したことも昔の夢物語りになった。

昭和２０年８月１５日(1945)終戦となり、セラム島の「ホニテト」において、８月２５日の軍旗拝授記念日の日の最後の連隊長佐々木慶雄大佐により、軍旗を焼き光栄ある浜田歩兵第２１連隊は遂に終りを告げたのである。

思えばその昔浜田城の炎上により、城下町浜田が終りを告げたのと同じ運命ともいえる。　顧みれば浜田歩兵第２１連隊は、広島より浜田に移駐以来約半世紀（４７年間）に亘り、浜田の経済を潤し、その当時連隊があるが故に、石見地方の中心地として政治、経済の面で浜田に力をつけ、街を賑わしてくれたが、連隊が無くなったことにより浜田市は朝日町商店街をはじめ淋しくなっていった。

５：古くから大陸との交易が行われ
水産基地として、また政治・経済・文化の中心地として栄えた

(1)　浜田港と大陸との交易

明（中国）の史書に、石見は銀と銅を産する（大森銀山のことをさしている）そして石見の港には長浜、浜田などのあることを記している。　また朝鮮の申叔舟という人の著した書には素晴らしいことが記してある。

それは、室町中期(1447)に石見の豪族周布和兼が、朝鮮の李朝と貿易をしていたことで、今から約５３７年前のことである。　その緒口は朝鮮の海岸船舶が日本海で難破し、乗組員が流れ着いたのが石州長浜で、周布家はこれらを懇ろに取扱い１カ月滞在して元気を回復し、朝鮮へ帰るとき和兼の父兼貞は、書を李朝世宗に呈すると共に刀、舟木朱紅、胡椒、面盤など沢山の土産品を贈っている。

これに対し、世宗は謝意を表して翌年大護軍を使遣し、日本の漂民左衛門三郎蒔次郎を送還して様々な礼物を届けて来た。　そこでそのお礼というので周布家から色々な物を送ると、世宗は又お礼返しに珍しい物を贈ってくるという風に、爾来双方の交歓がはじまったのである。　世宗実録によると、貿易船は天然の良港・長浜湾から出発することと記してある所からしても、その当時私貿易が活発に行われ、長浜湾頭が活況を呈したことは十分に考えられ、主なる輸出品は長浜の刀剣で輸入品は織物類、人参、珍材、陶器等であったようだ。

それから約３８０年余経って、天保初年(1829)会津屋八右衛門が松原湾を基地として、竹島、朝鮮、中国等と密貿易をはじめたことになるが、その後徳川の鎖

国時代が終わって、明治３２年になりようやく浜田港（瀬戸ケ島時代）が正式に開港場となり、神戸税関浜田支署が設置された。

そして、内国航路大阪商船の寄港をはじめ、明治３５年からは朝鮮、浦塩航路の浜田寄港がはじまり、４４年浜田港修築５ヵ年計画で整備を進め、大正７年に至り対朝鮮貿易の実績も伸展したので、対岸貿易期成同盟会を結成して基地拡大を計画したが、その後港勢も一進一退を辿り、加えて港湾設備の貧弱さと後背地の立地に恵まれないので、貿易発展に踏み切れなかった。

大正１０年、浜田駅が営業開始になり、やがて国鉄山陰線開通と共に、商港としての浜田港も急速に衰え大阪商船も廃船になった。

浜田がせっかく天然の良港を持ちながら、「海に生きる」ためには商港の大型整備と恵まれた後背地を作りだして、商港の抜本的発展策を講ずることと合わせて、水産基地としての施設整備と漁業の発展をはかる以外に道はない。

当時日本は支那事変から第二次世界大戦へ拡大の一途を辿り、国防の見地から昭和１７年から長浜地区に港の修築工事が始まったが、２０年終戦となり２４年開港閉鎖の寸前に陥ったがその苦難を切り抜け、昭和３２年遂に猛運動の末「重要港湾」の指定を受け今日に至る。

(2) 浜田魚港は明治以後漸次水産基地として脚光を浴びる

吉野朝時代(1334)には、瀬戸ケ島が漁場であったと伝えられているように、浜田の漁業は古くから瀬戸ケ島、浜田浦、松原を中心に行われていたが、せっかくの天然の良港と漁場を持ちながら、技術と施設が乏しかったので長い間小さな魚村に過ぎなかった。

しかし明治３９年になって県立水産学校が設立され、大正、昭和となって水産試験場や水産補修学校が建設され、その上近海に好漁場を控えているという立地条件に恵まれていたので、漸次水産業も発達し着目されるようになったが、なんといっても昭和７年浜田漁港修築工事が完成し、施設整備がなされてから、漁業基地として脚光を浴びるようになったといえよう。

かくて遠洋漁業の進歩と共に大型底曳船が多数建造され、更に出雲船団等が昭和８年頃にかけて大挙浜田に進出して、この地を根拠地として活動を開始したので水産業は一大飛躍を遂げた。

しかしながら、その後大型底曳船の大部分は、第二次世界大戦による徴用で海底の藻屑となり、漁業は頓に衰微したが、戦後漁民の増産意欲は燃え上がり資金資材等極めて困難な隘路を打開して、代船建造を強力に推進したので漁獲高は逐次増加の一途を辿り、昭和２２年１３０万貫、２３年２５０万貫、２４年３００万貫という戦前に劣らぬ活況を取り戻し、同年第三種漁港の指定を受けて、昭和２５年９月現在浜田漁港を基地とする大型底曳船団は２５統に達し、毎月の平均４５万貫（年５４０万貫）へと躍進し、昭和３３年には２２年の１６倍にも飛躍的に増加したので、施設整備の必要に迫られ、荷揚場、魚市場の拡張、臨港貨物船の延長、製氷施設の整備、無線局の設置等、漁港施設整備をするにつれて、県外船も浜田に集結するようになり漁港は頓に活気を呈し、併せて缶詰、かまぼこ、干魚等の水産加工業の振興により、「水産浜田」の名はいやが上にも高くなり、昭和４４年になり「特三漁港」の指定を受け今日に至る。

(3) 廃藩置県以来、実質的に石見地方の政治、経済、文化の中心地として栄えた

浜田は明治４年の廃藩置県により、石見全域を行政区域とする浜田県の県庁の所在地として、産業の振興と小学校、警察署、郵便局、銀行等の整備により商店街も出来、次第に石見の中心的立場が固められたが、明治９年浜田県を廃し、島根県に合併後、浜田支庁、郡役所が置かれ、石見の中心地として裁判所、税務署、県立中学校、女学校、水産学校等が設置され、次いで浜田港の開港、歩兵第２１連隊の移駐があり、大正・昭和にかけて山陰線の開通、県立女子師範学校、市立実践女学校、水産試験場の設置を見て、浜田は名実共に石見の政治、経済、文化の中心地として活気を呈した。

そして、浜田人の心の中には、落城から長州軍預かりという混乱期の中で、政治的、文化的な活動への憧れがあり、今一つは経済的に傑出したいという希望があったので、その現れとして明治、大正、昭和の時代にかけて、数多くの人材が傑出した。

明治	国学者	藤井宗雄（浜田市鍋石出身）
明治～大正	文芸評論家（演劇活動）	島村抱月（金城町出身　裁判所勤務）
大正～昭和	政治家（商工大臣）	俵　孫一（浜田市真光町）
昭和	文化勲章（冶金学泰）	俵　国一（浜田市真光町）
昭和	政治家（文部大臣）	大達茂雄（浜田市真光町）
昭和	水産功労者	丸川久俊（浜田市錦町）
昭和	文化勲章	橋本明治（浜田市田町）

『浜田藩追懐の碑』の建立

１：建立のいきさつ

浜田藩の碑と言える石碑の現在地をみると、藩庁所在地である浜田には城主歴代碑のみで、殉難者或は藩に事績のあった人の碑はない。　これは浜田藩の地が長州軍の侵入、不法占拠の後長州の預り地となり、大森県・浜田県成立後も長州閥に支配され、明治も中期から連隊の駐屯する所となり薩長藩閥の締め付けのひどい地域となっていった。

浜田の旧藩士をして長州征伐時の殉難者を顕彰したい考えが無かったわけではないが、やはり浜田藩を語るに大きい声がだせなかったのも事実である。　最近になって藩所在地浜田に藩の碑がないのはおかしい、建てられて然るべしとする考えが起きてきた。

－－中略－－

碑建立の動きを一つの行動に移されたのは土井博氏である。　浜田藩の碑建立の議は観光協会役員で賛同を得、市長及議員筋等にも賛同を得ることができた。

土井氏の発議された趣意は「いま爰に明治以来１２０余年の歳月の流れる中に、浜田藩政を偲び、先人を思慕し、浜田市の礎となられた方々を顕彰したい」とされ、対象として長州征伐、伏見の役、江戸上野の役の戦死者を考えておられた。

－－中略－－

碑の中央を飾る撰文は＜司馬遼太郎氏＞に依頼することになった。

－－中略－－

司馬氏は歴史小説家として当代随一の人である。　浜田との繋がりは『花神』のときで、この地にも何度か来られている。　岸静江や永井金三郎を誌中で取りあげて頂いている諠もある。

――後略――

2：建立時の広報

さる平成元年（１９８９）九月、浜田城山の浜田護国神社本殿北側に「浜田藩追懐の碑」が建立された。

その碑文は歴史小説作家として著名な司馬遼太郎氏の執筆である。

――中略――

司馬遼太郎氏は、ＮＨＫの大河ドラマになった著作（花神）の中で第二次長州征伐（石州口の戦い）を記述されており浜田の歴史にも詳しく、碑文の原稿は、司馬氏の石見の風土や石見人への思いが偲ばれる貴重な資料であり、この度公開するものです。

――後略――

3：「浜田藩追懐の碑」の碑文

「浜田藩追懐の碑文」

浜　田　城

石見国は、山多く、岩骨が海にちらばり、岩根に白波がだぎっている。

石見人はよく自然に耐え、頼るべきは、おのれの剛毅と質朴と、たがいに対する信のみという暮らしをつづけてきた。

石見人は誇りたかく、その誇るべき根拠は、ただ石見人であることなのである。

東に水田のゆたかな出雲があり、南に商人と貨財がゆきかう山陽道があり、西方には長門・周防があって、古来策謀がそだち、大勢力の成立する地だった。

石見はそれらにかこまれ、ある者は山を耕やし、ある者は砂鉄や銀を採り、或る者は荒海に漕ぎ出して漁をして、いつの世も倦むことがなかった。

浜田の地に城と城下がつくられたのは、江戸初期であった。幕府は、この城をもって、毛利氏という外様藩に対するいわば最前線の牙城とした。

以後、藩主は十八代を経、城は二百四十八年つづいた。幕末、西方の長州藩が革命化して、幕府の規制から離れた。

長州軍は時のいきおいを得、また火力と軍制を一新させ、各地で幕軍を破った。

ついには浜田城下に押しよせた。浜田藩は和戦についての衆議がまとまらず、さらには二十五歳の藩主松平武聡は病臥中でもあって、曲折のすえ、みずから城を焼いてしりぞいた。明治維新に先立つ二年前の慶応二年（一八六六）のことである。

いま、城あとは苔と草木と石垣のみである。それらに積もる風霜こそ歴史の記念碑といっていい。

司　馬　遼　太　郎

編集後記

当・経済同友会石見の国再生委員会では、大田市・邑南町から西へ、益田市・津和野町から吉賀町へと広がる石見地方を一体化し、これを広く全国的なねらいをもって広報・宣伝をし、地域の産業・経済振興に繋ぎたいと努力してきました。

石見地方には、文字どおり豊かな自然があり、その自然資源を活用して農林水産業の活発な事業展開も見受けられ、日本の故郷がここにあると強調したくなる特性・特色をもっています。

ところが、地形的にみても陰陽連絡といった南北につながる道路網が、東西に長くつながる石見を分断し、大田エリア、浜田エリア、益田エリアに分割され、石見地方の良さや各地域がもつ特性・特色を広く認識させる手段を見失っている傾向があります。

そこで、当・石見の国再生委員会としては、このたび別提言として、〔石見３回廊と地域特色の呼称の提言〕とする試案を出し、日本海沿岸に沿う国道９号線を＜海の道＞、中国山脈の尾根に沿った山道を＜四季の道＞、その両道に抱き込まれる高台の盆地集落をつなぐ道を＜温の道＞と呼ぶ３道と、その３道で結ばれる１８の地域に、それぞれ地域の特色を読んだ地域呼称を提言しています。

こうした活動の中で強く認識させられたのが、石見地方の中枢都市である浜田市があまりにも知られていないことでした。　浜田市は大化改新（661~671)の地方制度改革時に国府がおかれ、江戸時代初期に城と城下がつくられ２４８年間にわたってこの地方を統治した。　しかも幕府の直轄領で、近隣の外様藩に対する最前線の牙城としての役割もはたしてきました。

それが明治維新につながる長州軍の進攻にともない、当時の藩主・病臥中の武聡を城外に逃し、慶応２年(1866)年７月18日・浜田城の消失とともに、浜田の歴史は消え去ったとされています。

いま〔石見の国の再生〕をと呼びかける時に、その中枢的役割をはたした浜田を、もう一度見直し、新らしい石見の国においても、この地方の中心都市としての役目を持つべきだと強調したいことから、ここに＜浜田の歴史と伝統を学ぶ＞ことを提言し、関係する資料の一部を掲載しました。

資料１：浜田の歴史と伝統を学ぶ　は、
元浜田市長・梨田　精氏の著書「海に生きる浜田、明るい未来を開こう」から、転載させて頂きました。

資料２：「浜田藩追懐の碑」の建立　は、
浜田市文化財愛護会発行の、平成元年版と平成８年版の「亀山」から引用し、掲載させて頂きました。

最後に、石見の国の歴史的背景を知らせたいとの思いから、〔石見観光辞典刊行会〕が平成２０年に発刊された「石見観光辞典」から、石見の史跡・文化等で創設年次を調査し、それを一覧表として添付しておきました。

以　上

浜田の歴史と伝統を学ぶ

難読漢字　解説編

P～1　～2

伊　甘　郷　－　いかんのさと。
式　　内　－　しきない。
延　喜　式　－　えんぎしき。神名張によっている神社（式）
遍在　僻在　－　へんざい。へきざい。どこにもある一方にかたよった所
下　　僚　－　かりょう。地位の低い役人
京　　師　－　けいし。都は「大」師は衆で、多数の人が住む所
善　　政　－　ぜんせい。良い政治
　委　　－　ゆだねる。まかして。
墾田開拓　－　こんでんかいたく。（永年私財法）743 年天平 15 年
　　貴族豪族が（一地方に勢力を張り荘園を形成した。
隠　　然　－　いんぜん。表面には出ないが陰で強い力をもっている。
　倣　　－　ならう。手本にしてまねる。

「四等官制（しとうかんせい）」

国　　司　－　こくし。中、下級、貴族がつとめる役職
　　偉いほうから
　　守。かみ　－　介。すけ　－　掾。じょう　－　目。さかん
　　|　　|　　|　　|
　　(長官)　(次官)　(判官)　(主典)

国　　衙　－　こくが。という役所につとめる（諸国の政庁）
郡　　衙　－　ぐんが。郡の役所
郡　　司　－　ぐんじ。大領・少領・主政・主帳
　　郡司は国司とは違って任期がなく、終身でつとめ親から子へ、子から孫へと世襲する。

　尹　　－　いん。　令法で検察の役割をする長官
　嗣　　－　つぐ。嗣は諸候が国の後継者を定めることを表す。
嗣　　子　－　あとご
本居宣長　－　もとおりのりなが（江戸期の国学者）
柿本人麿　－　かきもとの ひとまろ（慶雲２年 704 頃）
　　（初代石見国守）
播磨国宍粟　－　はりまのくに しそう（地名）
譜代大名　－　ふだいだいみょう。徳川家に従っていた家臣。外様（とざま）親藩の内、大名に取り立てられた者

P～3

爾　　来　－　じらい。それ以来
奏　者　衆　－　そうしゃしゅう。身分の高い人に取り次をする人
説　　伏　－　せっぷく。道理を話して承知させる
異安心説　－　いあんじんせつ。宗祖の以来の伝統的な信心とは異なった系統の信仰。特に真宗で用いる
宗　　論　－　しゅうろん。仏教の宗派間でそれぞれの教義をめぐって行われる論争
普　　請　－　ふしん。多くの人々から寄付をあつめて堂や塔を建てること

P～4

幕　　閣　－　ばっかく。(江戸幕府の最高首脳部。老中、若年寄と三奉行、大目付からなる。

P～5

飄　　然　－　ひょうぜん。ふらりとやって来たり、立ち去ったりするさま。
渡辺崋山　－　わたなべかざん。江戸期の画家。蘭学者
欣喜雀躍　－　きんきじゃくやく。喜ぶこと

P～6

蟄　　居　－　ちっきょ。とじこもること。隠れる
備荒貯蓄　－　びこうちょちく。凶作や災害に対して前もって備えておくこと
扁　　額　－　へんがく。室内・門戸などに揚げる横長い額
「山門の－」

P～7

徳川斉昭　－　とくがわなりあき。江戸期の水戸藩主
河　　鰭　－　かわばた。人名
終　　焉　－　しゅうえん。命の終わり

P～9

大政奉還　　－　たいせいほうかん。(1867 年)10 月 14 日に討幕の密勅(みっちょく)がだされた同じ日に徳川慶喜は大政奉還した。
　　裡　　－　うち。物事のうちがわ

P～10

朝令暮改　－　ちょうれいぼかい。命令や規則が頻繁に変わって一定しないこと

P～11～P～12

懇　　ろ　－　ねんごろ。親切で丁寧だ。「　－　にもてなす」

P～13

後背地　－　こうはいち。都市や港の周辺にあって、その経済的活動が都市や港と深くかかわっている地域。ヒンターラント
　頓　　－　とみに。にわかに
　昂　　－　たかぶる。興奮する。
　擡　　－　もたげる。起こす　「頭を　－　」
　纏　　－　まつわる。関連する　「海に　－　」
　吝　　－　やぶさか。ためらい惜しむさま
　咎　　－　とがめる。非難する　「失敗を　－　」

石見の史跡年表－１

史跡名称	西暦	年代	場　所	施設特色
志都の岩屋		弥生時代	邑南・岩屋	大国主命・少彦名命が出雲巡回のとき仮宮。
順庵原１号墓	180	弥生後期	邑南・上鄕	四隅突出型、石棺２・木棺１
スクモ塚古墳	400	古墳時代	益田・久城	前方後円墳：高さ100m，後円径55m，県内最大
周布古墳	430	古墳時代	浜田・治和	長さ65m、後円径45m、後円部高さ 7m.
鵜の鼻古墳群	500	古墳時代	益田・遠田	円墳５０基、前方後円墳３基、出土品多数
物部神社	514	継体天皇	大田・川合	大和から移住の物部氏、石見一の宮。奉納品。
清水寺	600	聖徳太子建立の説	大田・大森	道服、色仏涅槃図、絵馬、鰐口等奉納品あり
下府廃寺跡	680	白鳳時代	浜田・下府	東の丘陵斜面に片山古墳、後豪族が寺院へ移設
柿本神社	725	神亀２年	益田・高津	1681亀井茲親が旧高津城地へ移設、宝物館あり
染羽天石勝神社	725	神亀２年	益田・染羽	天石勝命など神々合祀、益田氏崇敬、1583再建
正法寺	737	天平９年	三隅・三隅	菩薩型立像は大田・竜沢寺と２体の木喰仏
石見国分寺跡	741	天平13年	浜田・国分	1665年金蔵寺として再建、誕生釈迦仏立像。
石見国分尼寺跡	741	天平13年	浜田・国分	出土の瓦は石見国分寺跡の文様と同じ。
石見国分寺瓦窯路	741	天平13年	浜田・国分	石見国分寺・尼寺専用の瓦窯跡。
甘南備寺	746	天平18年	江津・桜江	行基が虚空菩薩を刻み、弘法大師が真言宗改宗
柿本人麿呂の歌碑と松		7世紀~8世紀	江津・都野津	持統～文武両帝に仕えた宮廷歌人、歌碑と松。
割田古墳	800	延歴時代	邑南・中野	横穴式石室、この時代の代表的な古墳である。
多陀寺	806	大同元年	浜田・生湯	本尊は十一面観音、木造天部像５９体あり。
諏訪神社参道杉並木	835	承和２年	邑南・矢上	信州・諏訪神社の分霊、樹径５ｍの巨木１８本
多鳩神社	861	貞観３年	江津・二宮	大和・高市神社の分霊を勧請。石見の二の宮
島の星山（星高山）	874	貞観16年	江津・島の星	隕石が降下、現在は中腹の冷昌寺にある。
大麻山	890	寛永２年	三隅・室谷	大麻神社は大麻比古命、猿多彦命を祀る。
波啼寺	1000	平安時代	大田・仁摩	平安期に移設、本尊は11面観音菩薩。
福王寺	1036	万寿３年	益田・中須	津波で流出、明治５年地震で再建、鏡と双六盤
常磐山八幡宮と大杉	1185	文治元年	金城・波佐	九州宇佐神社より勧請、樹齢 800年の杉古木
七尾城跡	1193	建久４年	益田・七尾	益田藤兼が1556大改修、益田城と別称、史跡。
指書の名号石	1213	建保年間	大田・三瓶	明光上人が指で書く、怪物をこらしめる。
仙岩寺	1223	天福元年	川本・谷戸	益田の福家氏築く、1576再建、本尊は薬師如来
三隅城跡	1229	寛喜元年	三隅・三隅	初代三隅兼信が高城山に築城、足利氏に勝つ。
長江寺	1230	嘉禄６年	川本・湯谷	小笠原氏の菩提寺、足利将軍の「獏の枕」あり
二ツ山城跡	1233	貞応２年	邑智・邑南	富永朝輔が築城、廃城 400年後、元就も入城。
本明城跡	1234	天福２年	江津・福屋	益田兼高の３子兼広が、福屋の地を得て築城。
大喜庵	1250	鎌倉中期	益田・乙吉	雪舟は1502～1506年にこの地で居住、死没。
青杉城跡	1250	鎌倉末期	美郷・明塚	南北朝時代、北朝の攻撃で1350年落城。
松山城跡	1290	正応３年	江津・松川	江の川河畔、上津川・江の川・都治川が自然の外堀。
津和野城跡	1295	永仁３年	津和野・後田	山城、関ヶ原戦で入城の坂崎出羽守が大改築。

石見の史跡年表－２

史跡名称	西暦	年代	場　所	施設特色
浄土寺	1306	徳治元年	美郷・粕淵	武蔵国麻布山善福寺真海が建立、真宗根本法舎
山吹城跡	1308~1311	延慶年間	大田・大森	銀山防衛の築城、関ヶ原合戦後直轄地で廃城
安楽寺庭園	1340	暦応年間	金城・今福	石門禅師が臨済宗東福寺派へ改宗、庭は枯山水
丁城跡	1340	南北朝 時代	美郷・賀正	毛利氏の出雲進攻の拠点。1566年閉城。
温湯城跡	1354	正平９年	川本・川本	小笠原長胤が建造、毛利氏と攻防に使われる。
医光寺	1363	正平18年	益田・染羽	本尊は薬師如来、益田家の菩提寺。雪舟名園。
萬福寺	1374	天授元年	益田・東町	益田兼見が移築、九重造の単層構造、寺宝多数
龍雲寺	1382	弘和２年	三隅・芦谷	入母屋唐風本堂は1832移築、教典・仏像等保存
鷺原八幡宮	1387	元中４年	津和野・鷺原	津和野藩守護神、神社建築様式を残す。禅寺風
金谷城山桜	1400		美郷・山本	樹齢５８０年の巨桜、三隅町太平桜と並ぶ名桜
城上神社	1434	永享６年	大田・大森	大森の氏神、大森の役人の家紋等史跡多数
佐毘売山神社	1434	永享６年	大田・大森	銀山の守護神、金山彦命、大銀鉱石を祀る。
小川家雪舟庭園	1460	寛正元年	津和野・和木	雪舟が造園、枯山水意匠・室町初期の手法。
益田兼堯の墓	1485	文明17年	益田・七尾	益田15代藩主応任の乱を過し、雪舟の名画あり
大元神社跡の樟	1500	樹齢450年以上	津和野・池村	本殿は移設、高さ31m,周囲12.5m,傘を広げた形
丸山城跡	1500	室町時代	川本・三原	小笠原15代大蔵長雄居城、1592山城廃止令廃城
宗林寺	1506	永正３年	邑南・口羽	口羽の菩提寺、涅槃像・陣笠・太刀・絵図等
串山（櫛島）城跡	1520	永正17年	大田・温泉津	温泉津港の突端、串島にあった城
石見銀山遺跡	14世紀初頭発見:1530		大田・大森	大久保長安:1601着任、５間歩、代官所跡等あり
不言城跡	1559	永録２年	大田・温泉津	毛利が石見攻略、２代吉川経家は秀吉に殺死。
鵜の丸城跡	1569	永録12年	大田・温泉津	秀吉が山中鹿介攻略のため築城、兵糧防護。
賀茂神社	1569	永録12年	邑南・阿須那	京都上賀茂神社の末社、板絵著色神場図等あり
温泉津港	1596～1643		大田・温泉津	朝鮮など対外交易の拠点、石見銀山積み出し港
三宅御土居跡	1600	慶長５年	益田・三宅	益田氏の居館跡、2004益田氏城館跡で史跡指定
正蓮寺	1609	慶長14年	旭　・木田	豊原喜一郎作の山門、龍が夜毎に水を飲む伝説
心覚寺	1620	元和６年	浜田・松原	松平康映が母心覚院の弔い、阿弥陀来は国宝
浜田城跡	1623	元和９年	浜田・殿町	三重櫓と呼ばれる天守や、六間長屋が置かれる
本覚寺	1624～1644	寛永年間	吉賀・朝倉	臨済宗へ改宗、本覚寺が別当寺で移築。
津和野藩御殿跡	1625	寛永３年	津和野・後田	南北300m, 東西140m, の溝切り、津和野城背景
嘉楽園	1625	寛永３年	津和野・後田	御殿の庭園、中央に頌徳碑、現在は津和野高校
定めの松	1640	江戸時代初期	大田・三瓶	石見銀山代官大久保守が植樹、県下最大の松
旧道面家住宅	1688～1704	元禄時代	吉賀・注川	石見地方の代表的な庶民住宅、軒下180mの高さ
道策の碑	1702	元禄15年	大田・仁摩	1678年四世本因坊となった山崎道策の碑
山辺神社・祇園祭り	1713	正徳３年	江津・本町	江津港に出入の船の安全を祈願して始める
龍源寺間歩	1715	正徳５年	大田・大森	他の４間歩とともに代官所直営、総延長600m,
永明寺	1729	享保14年	津和野・後田	津和野藩5代吉見頼弘創建、城主の菩提寺。

石見の史跡年表－３

史跡名称	西暦	年代	場　所	施設特色
三渡八幡宮	1743	寛保３年	津和野・池村	江戸中期以降の代表的建築、彫刻等の好資料。
羅漢寺（五百羅漢）	1764	明和元年	大田・大森	中央の石窟に釈迦、文殊、普賢。 500の羅漢像
太鼓谷稲荷神社	1773	安永２年	津和野・後谷	7代藩主亀井矩貞が京都伏見稲荷を勧請、五大稲荷の一つ
藩校養老館跡	1786	天明６年	津和野・後田	下中島から移築、儒学、医学、兵学を教え才人育成。
堀家庭園	1788	天明８年	津和野・邑輝	本邸は1733、庭園は大阪庭師作、自然主義型。
大久保石見守墓	1794	寛政６年	大田・大森	大森町大安寺跡、町並み整備や間歩の発掘。
笠松峠の畳石路	1811	文化８年	金城・波佐	津和野藩への道 1.2km. 石畳敷設・涼み松あり
紫白庭	1813	文化10年	大田・温泉津	天明の大飢饉から庭園造り、紫白庭と命名。
桜蔭館	1818	文化12年	津和野・山下清水	国学者:岡能臣が自宅を開館、藩学養老館の教授
満行寺	1820	文政３年	大田・仁摩	石見東部の真宗寺院最大の古刹
西周旧居	1829	文政12年	津和野・後田	茅葺きの平屋、土蔵あり、珍しい旧武家屋敷。
津和野藩家老多胡家表門	1854	安政年間	津和野・後田	養老館跡の通路前、棟門左右に番所をもつ。
旧割元庄屋「美嚢地屋敷」	1855	安政２年	津和野・道川	茅葺き入母屋造り、長屋門あり、資料等展示。
天秤ふいごの碑	1857	安政４年	川本・川本	天秤ふいごの発明者・清三郎の顕彰碑
高野寺	1860	万延元年	大田・温泉津	将海和尚が復興、真言宗仁和寺の古刹、史跡有
天領江津本町甍街道	1866~1869	慶応年間	江津・本町	幕府軍を破った長州軍が本陣を置く、主街道。
乙女峠記念聖堂	1868	明治初年	津和野・乙女山	隠れ切支丹信徒改宗のため配流、マリアと３６名。
井戸神社	1879	明治12年	大田・大森	代官井戸平左衛門を祀る、大飢饉の際救済。
岸静江墓碑	1880	明治13年	益田・名田	守備長岸静江が長州軍と戦い戦死、幕末の悲劇
蕪坂千人塚・殉教者追福碑	1890	明治23年	津和野・後田	乙女峠で殉教の浦上切支丹信徒の追福碑
津和野町郷土館	1921	大正10年	津和野・森村	養老館の書庫を転用、開館50年で新館に切替。
三隅神社・三隅公園	1937	昭和12年	三隅・三隅	南北朝戦で戦死の三隅氏を忍ぶ、境内に多樹木
泰佐八郎博士生家・泰記念館	1938	昭和13年	美都・都茂	北里博士のもとでベスト研究、医師泰博士の碑
島村抱月碑	1954	昭和29年	浜田・殿町	早大教授、芸術座を結成、自然主義文学活動家
森鷗外の旧宅と記念館	1954	昭和29年	津和野・町田	平屋簡素な構造、1995年隣接して記念館を建設
津和野大鳥居	1968	昭和43年	津和野・森村	コンクリート製高さ18m, 北九州から太鼓谷神社へ寄進
三隅記念梅林	1972	昭和47年	三隅・三隅	山頂に７種の梅1018本、公園のツツジ共に名物
金城町民俗資料館	1973	昭和48年	金城・波佐	山地民具758点、生活具321点等、山地民俗伝承。
森鷗外遺言碑	1973	昭和48年	津和野・後田	養老館の御書物館跡を利用、友人に託した遺言
石見安達美術館	1977	昭和52年	浜田・久代	安達啓三収集、美術品・民俗資料等3000点。
金城町歴史民俗資料館	1978	昭和53年	金城・波佐	粗鋼収納庫を転用、資料500点ほか製鉄用具多数
三隅町歴史民俗資料館	1979	昭和54年	三隅・三隅	三隅公園内にあり民俗資料・生産具等多数。
旭町歴史民俗資料館	1981	昭和56年	旭　・今市	紙すき用具等生産・生活用具300点等多数収納。
日原歴史民俗資料館	1981	昭和56年	津和野・枕瀬	江戸時代以降の民具・医療・生産具等多数収納
能海寛師顕彰碑	1982	昭和57年	金城・波佐	日本人として初めてチベットへ行く。
万葉公園	1982	昭和57年	益田・高津	万葉植物 153種、人麻呂や万葉集の資料多数。

「石見の国」読本
～浜 田 編～
《浜田の歴史と伝統を学ぶ》
発行　島根経済同友会
石見の国再生委員会
石　央　支　部
〒697-0027
浜田市殿町142-2
浜田商工会議所 事務局
TEL：0855-22-3025
FAX：0855-22-5400

印刷・製本　㈲浜田マイクロコピーセンター
TEL:0855-23-5115
FAX:0855-22-3741

浜田護国神社本殿横「浜田藩追懐の碑」